
写真。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

写真。

【Nコード】

N1060Q

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

片思いは、楽しく・・・そして苦しい。

俺の想い人は、明るく元気で、突拍子も無い事を言う。

でも、俺はそんな大垣の事が・・・

今度、修学旅行という一大イベントがある。

そこで同じ班になって、もっともっと仲良くなりたい！！

HR（前書き）

葵・聡太、美晴・芳彰の話の（そろそろシリーズ名を付けた方がいいかもしれない。）

現在の時点で（2011・01・11）時系列で、一番古いお話です。

話は、高校2年の修学旅行。

コースは奈良 京都 大阪です。

別に、前の話は一切関係ないので、

この話だけで読んで頂けると思います。

今日は修学旅行の班決めがある。俺は絶対大垣と同じ班になりたい。男女3人ずつの6人一組が基本だ。大垣は絶対、安田と柳田と組むはずだ。

「なあ三田、片山、班一緒にしないか？」

「いいけど・・・いや待て、田村。お前絶対大垣のところで言うよな？」

賛成しかけた三田が、思い直して嫌そうな顔を見せる。

「当然だ。」

この二人は俺の気持ちを知っている。

だからこそ話を持ちかけたのだが、向こうはだからOKを出さない。

「どうせ大垣は安田と一緒にだろ？あの二人性格がキツイんだよな・・・。」

「だよな・・・。あと一人はたぶん柳田で、あいつはおとなしくていいんだけどな。」

こいつらの予想も俺と同じだ。

安田と大垣。あの二人を知らないやつはこの学校にはきつといない。それほどに目立つやつらだ。

美人と評判の安田。

彼女はこれまでどれだけのラブレターをもらっているんだろうか？だが、それは彼女の性格を知らないか、Mの気があるヤツくらいだと俺は思う。

大垣は安田ほどじゃないが、それでもなかなかの美人だ。

彼女の奇をてらった発想と、行動力は凄まじい。

予想もつかない事を言い出し、おもしろい事をやらかす。

そして、公然の秘密なのだが・・・陰で人気のあるヤツの写真を売りさばいている。

どれだけのヤツが彼女から写真を買った事があるのか・・・。

ちなみに俺は買った事は無い。

本人の写真が売られるわけじゃないから必要が無い。

いや、自分で自分の写真を売るヤツってのも、どうかと思うな……。

えーと、どちらもはつきりした性格で、キツイと言えば……まあ
そうだろうな……。

「だけど大垣だぞ？きつと面白い自由行動になるぞ？」

俺の言葉に二人は顔を見合わせ、それから首を縦に振った。

やはりそれは現実になった。

「自由行動の案なんだけどさ……」

普通に寺社巡りしても、移動ばっかで時間潰しちゃうから、

コスプレしない？」

ほらきた。

「コスプレ？」

「大垣、何言い出すんだ？」

彼女は啞然として疑問を返す片山を片手で制してニツと笑うと、パ
ンフレットを広げた。

「どれでも好きなの選べてさ、衣装によっては散策も可。

時間があるかどうかまでは保障できないけど。」

そこには奈良や平安時代、幕末の衣装を着た人の写真が並んでいた。

「マジか？」

「普通は結構するんだけど、母の伝ともう一個の条件飲めば破格で
できるんだけど、

……どうだ？」

「条件ってなあに？」

真剣にパンスレットに覗き込む柳田が、みんなの疑問を代弁する。
すると大垣は一つの写真を指差した。

「これ、太夫でモデルやる事。だから葵はそれでヨロシク。」

最後の辺は、安田一人に向けての言葉だった。

花魁・・・と、思っていたが京都では太夫というのか・・・ちよつと勉強になつた気がする。

「ちよつと、私選べないの？」

安田は不満の声を上げるが、やるかやらないかではなく、着る衣装が既に決まっている事についてのよように聞こえるのだが、間違つてないよな？

「いいじゃん、きつと似合うよ？」

今度は封筒から写真を出して広げた。

「ほら、こんな種類あるんだよ？　ここから好きに選んでくれたらいいから。」

赤に白に黒に金、派手な柄の着物や帯。そして何種類もの髪飾り。目の前にこれだけ色鮮やかに並ぶと、心が揺らいできたらしい。

「えつと・・・、じゃあ美晴も一緒にやろうよ。」

安田よく言つた！　大垣の太夫姿は是非見たい。

「えーつ、嫌だよ。私は狩衣着るんだから。」

何だそれ？

「かりぎぬつて・・・何だ？」

耳慣れない言葉に俺は聞き返す。

「ん？　平安時代の貴族の普段着つて感じかな。束帯はきつちりし過ぎだし。」

それも知らねーよ。

パンスレットを眺めると、それらしい字を見つけた。

「・・・男装かよ？」

一瞬がっかりし、いや・・・それでも無いかと思ひ直す。

男装の麗人と言う言葉もあるし、見てみたい気になってきた。

「そ、いーでしょ？　誰か一緒に狩衣着ない？　頭中将やってよ。」

「じゃあ美晴ちゃんが光の君？」

「もちろん。」

なつ、大垣と柳田では会話が成立している。とうのちゆうじょうつて誰だよ？

ひかるのきみつてのは・・・ああ、光源氏が、じゃあ源氏物語の事
言ってたんだな。

題名しか知らねーっての。

「っーか、これいいのか？」

決めるだけ決めて後で先生に反対されたら、もう一回案考えるの
嫌だぞ？」

片山がもつともな意見を言った。

「大丈夫、先生には先言つてあるから。」

ある意味これもいい体験授業じゃないかってさ。」

・・・手回しが早い。

結局、誰も反対せずに大垣の案が採用された。

HR（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

例によって、朝10時の予約更新です。

全5話となります。

続きも読んでいただけると、うれしく思います。

「口田（口田）」

「口田」。

「口田」。

一日目

修学旅行当日。

朝早くに駅に集合して、まずは新幹線で奈良に向かう。

車内でも大垣は楽しそうだった。外を見てはしゃいでいる。

どうしていつもあんなに元気なんだろう？

結局、途中から寝てしまったが、まあそれは大垣に限った事ではない。

最初は珍しくても長く乗っていれば飽きる。しかも朝早かった。

俺はちよつと得した気分で、通路を挟んだ隣の席を眺めていた。

「お前よく寝てたな。」

紅葉にカメラを向ける大垣に近付き声をかけた。

「ああ田村か・・・、昨日寝て無いからな・・・まあ仕方無いだろう？」

一目俺を見て、再びカメラに向かうのが少しおもしろく無くて、からかい気味に余計な事を言ってみた。

「何だ、期待し過ぎて寝れなかったのか？」

「違う。妹がギリギリになって課題手伝えて言うから・・・。」

「手伝ったのか？」

「いや、それじゃ意味ないだろ。終わるまで見張ってた。」

こいつは・・・旅行前に何やってんだ？

妹の課題にそこまで付き合う必要ないだろ。

どう考えてもやってない妹が悪い。

「何時までやってたんだ？」

「んー、3時は過ぎてたな。」

結局、半端に寝ると起きられないからずっと起きてた。」

「じゃあ朝まで、何してたんだ？」

「ん？ 朝ご飯とお弁当の準備してた。」

何でも無い事のように、そう言った。

「女子の部屋行っていいか？」

昼食後に誰かがそう持ちかけて、ヒンシユクを買った。

しかし、他の誰かが

「じゃあ、逆に男子の行こうよ。」

と、単純に逆の提案をすると、とんとん拍子に話が進んで行った。

「大垣達も来るか？」

便乗して、その声をかけると、安田と柳田はあっさり拒否したが。

「んじゃ、私は行こうか？」

大垣だけは乗ってくれた。

安田が止めるものの、何事も経験だと笑って聞く耳を持たない。

俺は、心の中でガッツポーズをとった。

男女に分けられた部屋割りに疑問は無い。

だから、『部屋に女子が来る』それだけでテンションが上がる。

しかも特別な女子だ！

別にカードゲームや話しをするだけなのだが、

非日常的な場所で、非日常的な出来事。

ただ規則を破るっただけでも、何となくソワソワするっのに。

ああ、早くその時になってくれ。

消灯時間を過ぎ、最初の見回りが終わってから少しするとドアをノックする音がした。

大垣を含む三人が部屋に入ってきた。

心臓のドキドキが増した。

別にただのTシャツにジャージって格好だけど、制服と体操服以外は初めて見たとか、

珍しく髪を結んでいるとか、でもやっぱり夜に同じ部屋にいるってのが信じられない。

「お前、明日も眠いんじゃないのか？」

ちやっかり隣をキープし、カードを渡すついでに声をかけた。

「そうかもね、」

ジョーカー隣のスペードの5を抜いた。

揃いのカードがあつたらしく、2枚のカードを場に投げた。

「何で来る気になつたんだ？ 二人は即答で拒否つたる？」

「楽しそうな事はやつとく主義だ。」

結局ジョーカーは俺の元から動かなかつた。

ババ抜きが三週目にもなると、強運の持ち主はさすがに眠くなつたらしい。

欠伸の数が増えた。

他の女子は元気だが、大垣は足元の布団を魅力的に感じているようだ。

だがさすがに、ここで寝かすわけにはいかない。

「大垣・・・もう戻るか？」

ひそひそと声をかけると

「うん、そうする。さすがに二日目は無理だな。」

そう言つてふわりと笑つた。

・・・一瞬で顔が熱くなつた。

「じゃあ田村送つて行けよ。」

しつかり聞いていた三田が、ナイスなアシストをしてくれた。

恩に着る、親友！

だがそう上手くはいかないのがセオリーか、

「別に一人で戻るからいいよ。」

遠慮して断わるが、ここで引くわけにはいかない。

「いや、そんなフラフラしていると見つかるしぞ。」

少しずるい言い方をした。こっちも必死なんだ、悪く思わないでくれ。

「そっか、じゃよろしく。」

大垣は素直に聞いてくれた。

横を歩く大垣は、何かいつもと違って、そうフワフワしてて・・・危なっかしい。

「大垣、大丈夫か？」

「何が？」

本人にはその自覚が無いようで聞き返された。

「い、いや・・・眠いんだろ？」

俺の方を向いたその顔をまともに見て、ドキドキしてしまった。

「歩いてるから、結構平気。」

そっか・・・

廊下には誰もいないし、カーペットの敷かれた床を極力足音がしないように歩く。

俺達の声以外はどこかの電気の唸る音と、自動販売機の動作音しか聞こえない。

ふと思いつき、ポケットを探った。

「じゃあ少し寄り道しないか？ 飲み物おごるぞ、自販機だけ。」

そう言つて、少し先の自動販売機を示した。

「用意がいいな。じゃあ借りとく。」

炭酸飲料とミルクティを買つて、非常階段に出た。

「上行つてみよう。」

そう誘われるまま上がれる所まで上がった。

屋上には入れないように柵があったが、同じくらいの高さまでは行けた。

そこからは月の光を反射する池と、黒い影になった寺らしき建物が見えた。

他にはやっぱり影のような木と、別のホテルの窓が光っていた。

「おーキレイキレイ。」

大垣は空を見上げていた。

そこには満月に少し足りないのか、少し欠けたのか分からない形の月があった。

「大垣は、いつも楽しそうだよな。」

大垣はミルクティの缶をくわえたまま振り向いた。

「そりゃ、楽しんだ方がいいでしょ？」

不思議そうにそう言った。

「そうは言っても、なかなか楽しい事はつかじゃ無いだろ？」

面倒な事や、嫌な事、つらい事だってある。そう毎日楽しくやってられない。

俺はお気楽でも、おめでたくもできてない。

いや、別に大垣がめでたいヤツだと思ってるわけじゃなくてだな・・・えーと、

楽しそうにしてるのは、見ててこっちも楽しいし・・・

「それは考え方次第で結構どうにかなるもんだよ。」
缶を手すりの上に置き、欠伸をしている。

「今だって有意義な時間だ。知らない旅先で夜風に吹かれる。

この時間は今だけだ・・・まあ少し眠いけどさ、」

紅茶の缶を傾げる大垣は、とても前向きな考え方をする。

彼女に言わせれば、俺は毎日を無駄にして過ごしているのかもしれない。

そう思って聞いていたが、続いた言葉で少し違う気がした。

「人生は・・・いつ何が起こるか分からないんだ。

だから、できるだけ楽しくなるようにしてる。」

かなり重い事を言う。

そこには見た事の無い大垣がいた。

一日目（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

私は男子の部屋に行きました。

その途中で、先生が来て慌てて布団に隠れ、息を殺してやり過ごし・・・

今となってはいい思い出ですねー。

北海道でしたが。

二口田(控書也)

三語田也。

ひせ、まひん。

二日目

二日目はホテルからバスで京都に向かった。

窓から眺めた京都は想像と違って、新しい物と古い物が混在した場所だった。

普通の家並みの間に細い路地があったり、突然昔の建物が現れたり、五条大橋にがっかりしたり。

テレビのフレームワークの見事さに感心した。

昨日の夜大垣と話しをして、とても距離を感じた。

今は正直、気軽に声がかけにくい。

どうしてそんな考え方をするんだろっ……誰かに聞くか？となれば一人しかないよな。

「あー、美晴はお父さんいないからね、

……中1の時だったかな、急に倒れてそのまま……。」

安田はそう言った。

だから何が起こるか分からない何て言ったのかな……。

少し目が笑っている気がするが、今は気にしない事にする。

「まあ、もともとそんな感じだったけどね。

私、美晴の真っ直ぐ前向いてるとこ好きだから。」

俺も安田みたいに「好きだ」と自分の気持ちをはっきり言えたらな……。

でも、勝算の無い賭けに出られる程無謀じゃない。

いくら意気地なしと罵られても、後々気ままずくなって話せなくなるより、

今友人として接していられる方がいい。

……だから、友人のうちにもっと歩み寄らなければ……ちょっとだけそう決意した。

金閣寺のある鹿苑寺、銀閣寺のある慈照寺、渡月橋と見て回った後、

映画村で開放された。

みんな、程度の差はあるが役になりきって民家のセットで遊んでいる。

大垣はそんなヤツらの写真を撮っていた。

「田村く〜ん、昨日はどうだったんだ？」

三田が首を絞めにかかってきた。

「送って行って、なかなか戻ってこなかったら？」

片山も鳩尾に拳を押し付けてくる。くすぐりたい、それ。

「何もねーよ。」

片山に蹴りを入れて阻止した。

いい話があれば、とつくに自慢してるっての。

話をしてて、彼女との距離を感じて・・・それが何かショックで、しばらく一人でボーっとしてたって、そんな話の何が楽しい？

不満の表情を誤解してか、片山が縁起でもない事を言い出した。

「ひょっとして、振られたのか？」

「振られてねーよ！・・・告ってねーんだから。」

「チキンめ。」

背後から声がした。

んな事は自分が一番知ってるっての。

この日の夜、女子は遊びに来なかった。

もしかして昨日のように外にいるかもしれない。

そう思っつてジューズを2本買い、非常階段を登ってみたが誰もいなかった。

二日目（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

あ、短いですね、二二二。

田村くんの寂しい感じ、出てますか？

三日月（掬星也）

四語目也。

ひげ、まひげ。

三目目

今日は自由散策の日だ。つまりコスプレの日だ。今日の大垣はいつもに増してテンションが高い。

狩衣に着替えた大垣はノリノリで、店のカメラマンも楽しそうだった。

同じ衣装の俺に話を振ってくるが、ちゃんと返せず不満らしい。

自由行動の打ち合わせを踏まえ、図書室でそういう本を借りてはみたのだが、

目を読む事を拒否した。

結局のチャンスを生かす事ができなかった、新撰組の二人も同様で相手にならない。

十二単の柳田が出てきて、やっといい相手ができた。

「若紫！」

「光様・・・って、そんなに私小さい？」

俺には話が見えない。

小柄な柳田は、重くて動けないと言い座りっぱなしだ。

大垣はそのそばで、あれこれと話しかけては笑っている。

傍目には、柳田を口説いているようにしか見えない。

カメラを向けられて寄り添う姿は、とても絵になった。

確かに『源氏物語』はその手の話だけどさ・・・。

宝塚って所か？

「美晴ちゃん、その格好変に似合うよね、」

俺も思っていた事を、柳田が言った。

「志帆ちゃん・・・褒めるならちゃんと誉めてくれないかな？」

変にっつのが気になるんだけど？」

「だって女の子なのに・・・。」

柳田の気遣いは無駄だったようだ。

「関係ない。似合うよっつただけで十分じゃないか。」

腕組みをして不貞腐れる。

俺は思わず笑い出してしまった。

「似合う、似合う、見事な男装の麗人。」

「笑いながら言われても、説得力が無い。」

扇を鼻先に突きつけられた。

その時ようやく支度の済んだ安田が、店の人に付き添われて出て来た。

黒に金の内掛けに、中に覗く赤が映えて・・・かなりスゴイ。

「おーっ、葵、最高に色っぽい。」

大垣は俺の前からするりと逃げていく。

「ありがと、美晴も美少年って感じ。」

これだけの言葉で大垣の機嫌が治った。

二人の仲の良さを見せつけられ、複雑な気分になった。

安田の撮影をしながらワイワイやってたら、大垣がいなくなっていた。

「なあ、大垣知らないか？」

みんなが首を横に振る中、カメラを向けられた一人だけが澄ましていた。

「安田は知ってたんだな？」

何かやっぱり悔しい気がする。

「美晴はお色直し中。」

悪戯っぽく笑いながらそう言った。

大垣も太夫の衣装を着る事になっていたらしい。

母親の差し金で、本人も知らされていない。

連れて行かれて初めて耳にするという・・・まるでドッキリのようだ。

安田は、その事を支度の途中で聞いたと言う。

呆気にとられる俺達と余裕の安田との差は、聞いた時間の差ではなく、

こういう事態に慣れている・・・そんな気がした。

結構待たされてやっと出て来た大垣は安田に劣らず、いやそれ以上だった。

赤と紫と金、派手な色ばかりだが、それだけ見事な着物だった。

目の縁塗られた赤も、動くたびに揺れる飾りも、堂々と立つ大垣に似合っている。

でも普段とは別人のようで、どこか迫力がある。

「こうなったら、とことん楽しんでやる・・・。」

赤い唇から、開き直ったような言葉をこぼして安田の撮影に加わった。

そして俺も、カバンからデジカメを取り出した。

後で聞いた話によると、値下げの条件に大垣の太夫姿も入っていたらしい。

そうなれば、大垣に拒否権は無いも同然だ。

彼女の母親とこの店長は旧知の仲で、この二人によって企てられたのだと言っ。

大垣は「またやられた」と悔しがっていたが、一体どんな親なんだろう？

三日目（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

メインイベントです。

参考に写真屋さんのサイトを何件か見たんですが、
やりたいなー！！
と、本気で思いました。

四日目（前書き）

最終話です。

では、さようなら。

四日目

最終日は、ホテルからバスで大阪に向かった。残念な事に、途中から雨が降り始めた。

大阪のお笑いを見て、アーケードの下を少し散策し、バスの中から城を眺めて旅は終わった。

後は駅から新幹線に乗り、出発した駅へと戻るだけだ。今度の車内でも寝るヤツがたくさんいた。

「今日は寝ないんだな？」

窓側の席で外を眺めている大垣に声をかけた。

俺の席は彼女の正面という、非常にうれしい配置にある。

安田は寝てしまい、柳田は別の席に行っている。

俺の隣の男二人も、どっかに行ってしまった。

・・・きつと後で高くつくだろう。

「ああ、まだ眠くないからさ、眠くなれば寝ると思うぞ。」

当たり前の事を返されてしまい、言葉を繋ぐ事ができなかった。

大垣は、再び景色を眺め始めた。

いやいや、負けるな和久。

「まあそうだな・・・あ、色々写真撮ってたけど、何かいいのあったか？」

「ん？ そうだな、葵の写真は気合い入れて撮ったけど、後はどうかな？」

取り込んでからじゃないと、少しボケてても分かんないからな、

バッテリー気にしてあんまり撮れなかったし、やっぱ予備にもう

一本欲しかった、

予測が甘かったな。」

写真がらみの話なら、生き生きと喋る。

だから圧倒されてちゃ駄目だ、和久。

「俺はいいもん撮れたぞ。」

衣装に着替えたのももちろんだが、それ以外にも結構大垣の写真を撮っていた。

それだけでも大収穫な旅だった。

「へー、何撮ったの？」

やっと話に乗ってくれた。

「お前の寝顔。」

大垣は一瞬止まって赤くなった。

こいつもこんな所があるんだな。

「消せ！ 今すぐ消せ、いやカメラよこせ、私が消す！」

「美晴・・・どしたの？」

騒ぐ大垣の声で、安田が起きた。

二人だけの時間が終わってしまった。

「田村、カメラ！」

いやいや、いくら言われてもこれは渡せないな。

これは俺の宝物だ。

四日目（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました！！

くつつく話ばつかだったから、フラグの立たない話を・・・と。

空振りしまくる男の子がちゃんと書けていたでしょう？

（キャラの違いを出す言葉の選択、が今回の自分に設けた課題でした）

活動報告で書いた、風呂の大掃除しながら思いついた話で使う小ネタと、

前回更新の話で出した写真の小ネタをMIXで。

・・・ああ、着たいな狩衣。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1060q/>

写真。

2011年2月27日15時38分発行